

価を行った。

一般に歴史の講述は容易ではない。しかし、具体的な資料を示しながら、その背景などについて述べれば、その教育効果はきわめて大きい。

(金沢医科大学)

外科の守護聖人サン・コーム について

大村敏郎

パリの外科医組合は十三世紀にサン・ルイ王の外科医ジョン・ピタールの呼びかけによって組織された。本拠のおかれた所がサン・コーム教会であったことから、コレージュ・ド・サン・コームと呼ばれる外科医学校が出来、十八世紀には華々しい活躍をして、王立外科アカデミーに発展し、確固たる外科医の地位を築きあげた。

その名前に使われたサン・コームについてわが国ではあまり知られていないので、どういふ人物なのか紹介すると共に、外科との結びつきの経過にふれてみたい。

サン・コームは単独で取上げられる他に、サン・ダミアンと組み合せて登場することがある。カトリックの暦で見ると、九月二十七日はこの二人の聖人の祝日になっている。この二人は生まれた年ははっきりしないが三世紀のア

ラブ人でシリシーのエゲでキリスト教徒の母から生まれ
た。二人の関係は兄弟である。いずれもシリアで医学を修
め、郷里に帰って医療を行っていた。彼等の医療は神秘的
なもので、盲人に光を、聾者に音を、麻痺した四肢に運動
回復を、狂人には正気を与えろといった具合で、人々に喜
びと力と健康をもたらしたという。

もう一つの特徴は、決して謝礼をうけとらないことであ
った。すべて慈善の心から発していた。ギリシヤ人達はこ
の二人をアナルギレス（金要らず）というあだ名で呼んで
いた。

このような評判を耳にしたローマから派遣の地方総督リ
シアスは彼等と呼び出した。しかしキリスト教徒として偶
像礼拝を拒否したコム兄弟は迫害をうけ、処刑されるこ
とになった。その際色々な奇蹟が起り、リシアスの思うよ
うには事が運ばなかったが、ついに紀元二八七年の九月
二十七日に処刑が行われた。それが後に殉教とみとめられ
て聖人の仲間入りをする。キリスト教がローマの国教とし
て認められる三二二年のわずか四半世紀前のことであっ
た。

一旦はエゲに埋葬されたが、遺体はシルに移され、そこ
からサン・コム信仰が広まっていった。五世紀にはスベ
インのサラマンク、スイスのチューリッヒ、ドイツのミュ
ンヘンやエツセン、そして六世紀に入ると聖遺物の一部が
ローマに運ばれて教会が建ち、そこで多くの病人が信仰に
より回復したという。

このサン・コム信仰がパリ周辺に伝わるのは十二世紀
の終りに十字軍の帰途、法皇アレクサンドル三世から聖遺
物の一部を受けた郷士ジャン・ド・ボーモンがパリ北方三
十キロのリュザルシュ村に持帰り、教会をたて（現存する）、
ここに巡礼がやってくるようになった。

十三世紀にサン・コムの別の聖遺物をもとにパリの町
にサン・コム教会が建つ。当時のコルドリエ通りとアル
ブ通りの角、現在のサン・ミシエル大通りと医学校通りの
交叉点西南の角である。

一二一五年のラトラン宗教会議で僧籍にある者が血や膿
にふれることを禁じて以来、医者と外科医が区別されるよ
うになる。一二二六年に組織された外科医組合は初め本拠
を置いたサン・ジャック教会から、サン・コム教会へ移

ってきた。サン・コームの伝説には足の移植縫合というような例もあって、サン・コームの時代には内科・外科という区別がないが、外科医にとつて親しめる存在であったにちがいない。

サン・コームの精神に順じて毎月第一月旺日にサン・コーム教会で無料診療を行うようになった。また一三二〇年、フィリップ五世の王妃ジャンヌ・ド・ブルゴーニュがパリとリュザルシュのサン・コーム教会間の交流を計り、毎年九月二十七日にパリから外科医達が村を訪れ、貧しい病人を無料で見舞うことになった。

一六〇一年のサン・コームの祝日に生まれたルイ十三世が、同じ守護聖人を持つよしみで外科医組合の名譽会長になるというエピソードもあるが、サン・コームの外科医達はパリの医学部医より常に漸新な建設的な活動をつづけていた。一六九一年に作った円型講堂は現存しているが、教会自体は革命後一七九一年に廃止され何も残っていない。外科学校は一七七六年に建物を新築して移転した。現在の旧医学部と呼ばれている建物である。

リュザルシュ村のサン・コーム詣は十九世紀に入って

も、ラエネック、クルベイエル、レカミエ等が行ったという記録がある。

現代のパリの医療の世界に、サン・コームの跡を求めようとすると、新医学部の外壁の見立たぬ所にあるサン・コームのレリーフと、オテル・ディユ病院の外科病棟の名前位しか見出せないが、卓越した技と慈善の精神をもった医の姿勢を守ったサン・コームという人物をわれわれは見失なつてはいけなないと考えている。

(川崎市立井田病院)